



筑紫女学園大学リポジト

The Chinese Women's Study Abroad in the Modern China

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-05-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 崔, 淑芬, CUI, Shufen メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/440

近代中国における女子留学

崔 淑 芬

The Chinese Women's Study Abroad in the Modern China

CUI Shu Fen

はじめに

光緒三十三年一月二日（一九〇七年三月八日）に発布した「女子小学堂章程」・「女子師範学堂章程」は、中国女子教育を全国的に規定した最初の女子学校の法令である。中国の女子教育史上において、画期的な転換点でもある。一九二〇年以來、民国政府によって、政策的には近代的な女子教育や女性法的地位の確立がはかられ、他方、新文化運動を引き継いだ儒教批判や西洋の近代思想の導入によって新しい学校制度が設立され、女性解放の革命運動が昂揚すると同時に、女性の教育は著しく発展した。「新女性」と名付けた社会的な運動の中で、女性の纏足廃止や学校教育を受ける運動が活発化する一方、女子留学の動きがある。留学ルートは主に欧米と日本である。本論は、この二つの留学ルートおよび代表的な人物の分析を通して、女子留学教育の実状、影響、また、彼女達の生き方を考察する試みとしたい。

一、欧米留学

女子の欧米留学は、一八八二年、アメリカ教会の賛助による医学を勉強するための数名の派遣であった。これが中国における初めての女子留学である。その留学は教会女学が設置された後に始まった。「西洋女宣教師は海を渡って中国にやって来て、病院を開き、救災の活動に参加した。また、女塾を設置し、中国の幼女を集め、西洋の文化、言語を教え続けた。成績の優秀な女子を外国に連れて行って、数年間の留学をさせる。」（注1）と、『万国公報』に載っている。最も早かった女子留学生は四人、一人は浙江省寧波の金雅妹であった。彼女は一八六〇年六歳で、宣教師にアメリカに連れて行かれ、留学した。ニューヨーク女子医科大学を卒業、

一八八八年帰国、一九〇七年、天津で医科学校を設置し、中国早期の医護人材を養成した。金雅妹の次に留学したのは福州の柯金英。彼女は一八九二年、アメリカの女子医科大学を卒業、帰国後、福州婦孺病院の経営を担当した。一八九八年、李鴻章の推薦によって、中国の女性代表として、イギリス・ロンドンの女性国際会議に出席した。これは中国の女性史において初めてのことであった。あとの二人は江西の康愛徳と湖北の石美玉であった。彼女たちもアメリカの医科大学を卒業、一八九六年に帰国、祖国の医学に貢献をしたのである。

ところで、中国においては、最初、海外への留学を提唱したのは、中国近代早期の改良派である容閔であった。容閔（一八二八年～一九一二年）、字は達萌。号は純甫。広東省香山県南屏生まれ。清末の政治改良派。十五年にわたり西洋式教育を受け、一八五四年アメリカエール大学最初の中国人留学生として卒業した。帰国後、西学によって中国を新しい国たらしめ、新式武器と教育を受けた人材によって国を強めようと主張し、海外留学を提唱した。彼はそれを実現する事が中国近代化に寄与する重要な一環であると見ていた。

当時の官費留学生は、ほとんどアメリカ、フランス、ドイツなどの国に派遣され、その習得科目は語学あるいは軍備、製造、車両機械等の操作に限られていた。一八七二年、清政府が軍事、航海、造船などの人材養成のため、百三十名の十二～十五歳の少年をアメリカに留学させた。一八八一年彼らを帰国させたが、その時、大学を卒業した者は二名しかいなかった。これが欧米留学の始めである。

一八七五年、清政府は仏、ドイツ、イギリスなどへ研修生を派遣しており、工業と軍事人材を育成するため採鉱、航海の知識を学ばせた。以上はいずれにしても清政府の「強兵」の方針に基づいた、男子のみの留学派遣であった。

一八九四年～一八九五年の日清戦争に敗れた中国は、国力が足りないとの見解に立ち、学術振興や他国留学が一層目立った。一九〇七年、江蘇省は十名の優れた者を選抜し、アメリカに留学させたが、そのうち三名が女性である。ここで注目すべき点は、公費留学生であったことで、これは中国史上初めてのことであった。政府による女性留学派遣の開拓である（注2）。

一九一〇年にアメリカ東部で留学していた女性は三十六名、その中に宋慶齡もいた。一九一一年、学部は「編訂女生留学酌補・官費辦法」の中で、「欧米への留学希望を持っている女性は、学歴優秀、品質良く、留学後、国に役立つ者なら官費支給が可能……これにより女学教育の発展を促す」（注3）と規定した。一九一一年の『教育雑誌』の「留米中国学生統計」によると、官費・私費での留米女性は五十二名、平均年齢は二十五歳であった（注4）。

民国以後の欧米留学は、以前より数が増えるだけでなく、各種の留学形式も現れた。留仏「勤工儉学」は、その一つである。一九一二年四月、李石曾、呉玉章は北京で「留仏儉学会」、「留仏女子儉学会」の自費留仏組織をつくり、女子の自費によるフランスへの留学を鼓吹した。同年、鄭毓秀と章明保の二人がバリの女学校に留学、これが女性留仏の始まりである。一九一三年、民国政府は女性が男性と同じように国費で留学できることを定め、一九一四年から二年に一度、十名の女子を留米させたのである。欧米留学が大きな転換点となったのは、一九一九

年の五四運動である。

五四運動は元来、学生の愛国運動の一種であるが、中国では「解放運動」と名付けている。では、なぜそれが「解放運動」と呼ばれているのか。思想の解放、人生の再建、また種々の運動が打って一丸となったものだったからである。中国における解放運動は、およそ一八六〇年のアロー号事件以後にその種が撒かれ、一八九四年の日清戦争以後に唱導され、一九一一年の辛亥革命に至って、その成果を納めた。しかしこれは、単に政治的な解放に過ぎない。国あるいは女性にとっての開放運動は、一九一五年の「文学運動」に萌芽し、一九一九年に爆発、最高潮に達したのである。

中国の伝統的倫理思想に対して最初に攻撃の矢を放ったのは陳独秀で、これに呼応して起ったのが胡適、錢玄同などの先覚者である。陳独秀は雑誌『新青年』を通じ、三綱五常を批判、文学革命、いわゆる白話文を普及する文学革命運動を起し、さらにその後、標準語の宣伝をし始めた。これら種々の運動が結びつき、全体的な思想解放運動が醸成されたのである。一九一九年、五四運動が爆発した直接の原因は、内外二点から見れば、内的原因は現行政治が人民の信頼を失ってしまったこと、外的要因は時代潮流の動きであった。当時、ドイツの敗戦があり、ロシアでの革命は専政を転覆して労農政権を建設、これは中国の青年に大きな刺激を与えた。軍国主義を批判、平和を求め、青年たちは現状への不満の意を表わして遂に解放運動が爆発、民主社会、政府も民主的であり、道徳も民主的、教育も民主的、さらには一切の制度も思想も皆民主の基礎の上に建築されることを要求したのである。この意味で五四運動は解放運動でもあり、民主運動でもある。この影響で、中国留学生はフランスで「中国国際和平協会」をつくった。鄭毓秀はそのリーダーであり、彼女は五四運動の直後、五月九日の国恥記念会で「(日本の)二十一ヵ条要求は亡国ものである。認めてはいけない」と皆に呼びかけたのである。

民国時期における留学教育の主旨については、明確な法令はないが(注5)、留学生派遣の目的は、一つ、国家の需要に応じること、一つ、地方の需要に応じること、そのため必要な人材を留学を通して養成することにある。留学資格は国費と私費留学生の二種類に分け、国費の場合は、以前に大学の教授あるいは助教授を二年以上の経験のある者。専門学校、高等師範学校の教員歴二年以上の経験者、外国の大学、高等専門学校の本科卒業生。また、国内の本科卒業生、国内の専門学校、高等師範卒業生であるが、留学試験を受けて合格した者(注6)。以上の資格を持っている者は、(一) 中国の文、史、地の知識を持ち、国の裏切り者とならない、(二) 科学と外国語は相当な基礎を持つことで外国の大学院で直接、研究ができる、(三) 教育の経験があるため、その研究は本国の実情に合う、(四) 良質な留学生を派遣すれば、国は金銭の損失もないし、利益を害しないというわけである。私費留学生の資格は、中学以上レベルの卒業生、中学以上レベルの教員。このように教育部は規定した。しかし、民間の留学は依然、盛んであった。

一九一九年から一九二一年まで千七百名あまりの留学生がフランスに行ったが、そのうち五十名が女性であった。彼女たちは中国各地の地域から集まり、湖南省と四川省は十三名ずつ、

江蘇省五名、直隸省三名、福建省と浙江省はそれぞれ二名、ほかの地域が数名いた。留学の専門は以前より分野が広く、政治、法学、経済学、数学、化学、地史、美術と従来の医学などである。そこで美談となったのは、五十四歳の葛健豪であった。

葛健豪（一八六五年～一九四三年）の名前は中国でも知っている人は少ないと思われるが、彼女は中国の女性革命運動の指導者である蔡暢、および毛沢東の親友で革命指導者蔡和森兄弟の母親である。原名は葛蘭英、湖南省荷葉の素封家に生まれた清朝官僚の名門の出である。三男三女の母親の蔡健豪は進歩的な思想の持主で、本人は纏足であるが、娘にはさせず、いつも男の子の服装をさせた。のち夫から離縁され、生活の窮境から自分の生きる道を歩もうと決心した。五十歳近くになり、小さな足で湖南女子教育養習所に入り、職業に関する教育を受け、一九一五年卒業、故郷の湘郷県に第二女子簡易職業学校を創立し自ら校長兼教員となり、学費を免除して機織り科とミシン科の学生には生活費まで出した。一九一九年十二月、娘の蔡暢、息子の蔡和森とともにフランスに向い、勤工儉学に参加、留学したのである。彼女の渡仏は青年たちに感動を与え、それは湖南省長沙の新聞『大公報』にも大きく取り上げられた。

三十年代以後になると、留仏「勤工儉学」は盛んとなり、周恩来、鄧小平、蔡和森、徐特立、李立三、王若飛、李維漢のような中国共産党の革命家が多く現れ、中には女性革命家蔡暢、向警予らの代表的な人物もいた。

蔡暢（一九〇〇年～一九九〇年）、原名は咸熙、上述した葛健豪の六人兄弟の末子で、中国共産党創成期の理論家蔡和森の妹である。一九一五年二月、母親に地元の周南女校に入学させられ、蔡暢と名乗ることになった。一九一九年十二月、母や兄の蔡和森、向警予ら三十数名と共に湖南からフランスへ出発、勤工儉学運動に参加した。モンテーニュ女子公学でフランス語を学びながら、マルクス主義を標榜する革命組織の社民学会に入っており、二十二年、中国社会主義青年団に加入、二十三年春、誕生したばかりの中国共産党に入党した。同年、パリで中国共産党の指導者、のち財政経済専門家の李富春と結婚し、二十五年二月、夫とともにモスクワに移り東方勤労者大学（クートベ）に学ぶ。同八月帰国後、国民革命運動に従事、活躍した。

一九三一年十一月、夫李富春とともに江西ソヴィエト区に入り、一九三四年十月～一九三五年の「長征」に参加した。一九四五年四月からはじまった中国共産党第七回大会で、唯一の女性中央委員となり、一九四八年、チェコスロヴァキアのプラハで開催された国際民主婦人連合理事会に執行委員として出席、「独立、民主、平和のために闘う中国女性」という演説を行い、国際的な反響を呼んだ。その後もいくつかの委員を担当している。一九四九年十月一日、中華人民共和国建国後、彼女は中国共産党中央委員、婦女工作委員会書記、人民政府委員会委員、婦女連合会主席、名誉主席などを兼任し続け、一九九〇年九月十一日に北京で病死した。享年八十九。彼女の一生は中国女性の解放に捧げられ、その陰にあったのは家族の大きな支えと、フランスにおける勤工儉学であったと言えよう。

以上の蔡暢のほかにも、やはりもう一人、向警予を取り上げなければならない。彼女は三十三歳で一人の若き革命家として処刑された。

向警予（一八九五年～一九二八年）、原名向俊賢。別名向警予、筆名警予・振宇。湖南省溆浦の商人の家庭に生まれ、十人兄弟の九番目である。女性革命家秋瑾と並んで中国婦女運動、革命運動家の代表者である。彼女は幼い頃から、父親が女子教育に理解があったため、家庭教育から小学校まで学んだ。地元では初めての女生徒であった。また「中国同盟会」に加入した兄、向仙鉞の影響を受けた。当時、長兄仙鉞は日本への官費留学生で、早稲田大学法政経済科に学び、七兄仙鐘は明治大学商科を卒業、五兄仙良、十弟淑は京都府立医科大学を卒業した。家庭の「書香門弟」（学者風の家柄）の影響で向警予は読書が好きで、「離騷」や「木蘭辞」、民主を提唱する『新民叢報』などを愛読した。一九一一年、常德女子師範学校に入学、その後、湖南省第一女子師範学校に転校した。学問に専念しながらも、国家や女性の問題に関心を持つようになる。一九一五年、袁世凱が日本の「二十一カ条の要求」を甘受したことに對し、全国規模で反対運動が起きていた。向警予も校内の討論会で積極的に発言し、また街頭演説にも参加した。

一九一六年夏、また、向警予は周南女子師範学校に再転校して卒業、「教育救国」の理念を胸に抱き、故郷で溆浦学堂の校長となった。彼女にとって大きな人生転機となったのは、やはりフランス勤工儉学であった。一九一九年、新民学会に参加した彼女は、毛沢東、蔡和森らと交流、十二月には周南女子留仏勤工儉学会を組織し、同月、上海を出発してフランスへと渡った。モンテーニュの女子公学で、働きながら「半工半読」の生活を送った。一九二〇年、前述した蔡暢の兄、蔡和森と結婚し、「向蔡同盟」と囃された。彼女はマルクス主義文献である『共産党宣言』、『資本論』、『家族、私有財産及び国家の起源』などを読破、夫とともに社会主義を目指す「工学世界社」の活動に参加、ロシア的革命を主張、宣伝した。フランスでの勉強と実践の中で、模索しながらも、マルクス主義によって中国を救うという確信を持つに至った。そこから向警予の人生が大きく変わる。一九二一年十一月、リヨン大学の紛争で強制帰国させられた蔡和森を追うように帰国の途についた。

一九二二年、彼女は中国共産党に入党、まもなく中央婦女部部長に就任、のち婦女運動委員会初代書記となり、上海で革命の活動に参加した。二人の子供の母親である向警予は、母性の愛を祖国に注ぎ込んだのである。彼女の優れた革命活動としては、いわゆる実践、国民革命運動や労働運動を通じて婦人運動を位置付け、自ら実際活動を行った。一九二四年一月、上海糸廠女工協会を創設、女工と接触して宣伝、教育活動にたずさわった。一九二五年十月～一九二七年三月まで、中国共産党中央委員会は向警予と蔡和森をモスクワへ派遣、東方共産主義者労働大学で学ばせた。一九二七年三月に帰国した向警予は、武漢で宣伝活動や農村における土地革命と武装闘争を指導した。国共分裂後の武漢は極めて危険な地で、共産党の指導者はその前後、他の地域に移動したが、向警予はなおも武漢で活動を続けた。そして一九二八年三月二十日、漢口のフランス租界で逮捕され、国民政府に引き渡された。五月一日、漢口で処刑。

留学によって現れた女子革命運動指導者は、向警予のほか、一九二一年留仏勤工儉学の郭隆真がいる。彼女は一九二一年、留仏勤工儉学の後、中国共産党員となり、モスクワの東方大学

で短期の勉強をさせられ、一九二七年に帰国、北京や東北地域、山東で活躍、女性運動を起こした。一九三〇年、青島で軍閥の韓復榘に殺された。

とにかく変動期であった民国時期における一部の女性留学者の動機と目的は、自由を求め、祖国を救いたいという理念の者もいれば、専門的な実業知識を学び、国に報いようとするタイプの女子もいる。たとえば、湖南省長沙周南女校出身の勞君展と魏璧。彼女たちは一九二〇年、蔡元培に推薦されフランスのリヨン大学数学専門学校で学んだ。のち勞君展はパリ大学に合格、キュリー夫人に従って放射性物理を研究した。彼女はキュリー夫人の指導を受けた、中国唯一の女性である。一九二七年、卒業した勞君展が帰国、北京大学の教授となり、数学を教えながら『積分学綱要』、『フランス大学数学大綱』を翻訳した。これらの本は中国の大学における数学教育の研究に大きな役割を果たした。この本は一九五二年にも再版された。

ところで、研究分野がまったく違う幾人かも成功した。例えば、美術の専門分野においては、一人は一九一二年からパリ国立高等美術学校で芸術の世界に没頭した方君璧である。一九三三年に帰国後、油絵のほか中国絵画、さらに両者を見事に融合させた作品を発表し、油絵の透視と立体的特徴と、中国の伝統的水墨画への真の美を追求した独特な風格の画風を生み出した。彼女の絵は国内外で展示され、北京、広州、香港、フランス、日本、南米で高く評価された。さらに一九七四年、パリ東方芸術は彼女の六十年間の美術生涯を記念するため、特別な「回顧展」を開催した。

もう一人の女性画家潘玉良は、悲惨で数奇な人生を歩んだ女性である。原名は張玉良で、幼い頃に父母がなくなり、養女としておじに育てられたが、十三歳の時、そのおじに妓院に入れられ、のち地方の官吏潘贊化が彼女を妾として引き取った。彼女は潘贊化の恩に感謝するため、張から潘という苗字に変えた。天資聡慧な潘玉良は偶然の機会から隣家の美術教授洪野の影響で絵を描き始め、ついにフランスのリヨン美術学校に合格、留仏したのである。一九二八年に帰国、上海美術専門学校で教え、また有名な画家徐悲鴻の招聘によって南京中央大学芸術学部の教授となった。優れた芸術家であったが、妓女、妾など社会的に軽視された出身の潘玉良が、白い目で見られたり、絵画展の作品がひどく傷つけられたりする迫害に続々と出会った。彼女の「魂は中華大地に帰りたい」という夢はすべて壊れ、失意の中で彼女は絵画展の収入を全て寄付、再び一人で異国のパリに旅立った。彼女の絵は生き生きとした、女性の形象を現すものが多く、代表作「黒女像」、「帽子をかぶった女性」、「周小蘭像」などは、極めて高く評価された。近代における有名な男女の画家の中でも、有数の美術家である。老後、祖国への思いを懐きながら異国で息をひきとった。

欧米で成功した女性画家には、蔡元培の娘、蔡威廉がいる。彼女は十数年の欧州での芸術の勉強と研究で、一九二八年に帰国後、国立杭州芸専の西洋絵画の教授に任命された。代表作は「天河会」、「秋瑾紹興就義図」などがある。

以上のように、欧米に留学して成功した女性画家は、帰国後教員になった者が多かった。彼女たちは中国古来の女性美術史に新たな影響を与えたのである。

このように、大勢の青年たちが欧米に留学、中でも私費留學生が目立ち、一九四〇年以後、国民党政府は「三民主義」に従うことを私費留学の条件としていたため、欧米だけで六百余人りに上った。

官費留學生の派遣が一九〇三年から実施された。そのきっかけは、一九〇五年、両江総督の端方が憲政考察五大臣の一人として、欧米視察に赴いたことに始まる。彼はそこで、アメリカの大学は中国留學生に奨学金を出すという話を受け、帰国後の一九〇七年、アメリカ留学の學生を選出した。うち三名は女子で、これが女性官費留學生の始めであった。一九一一年、学部は「編訂女生留学酌補官費辦法」の中で、「欧米留学の女性選抜の基準は、成績や人柄のほか道徳的にも優れた人間で、留学して帰国後は我が国の教育者として任用する。官費留學生の費用は学部により交付される。地方においても適切な女性がいれば、それも官費でアメリカに留学できる。これをもって女学教育を発展向上させる」（注7）と、女性の官費による欧米留学制度を定めた。一九一一年の『教育雑誌』「欧米中国學生の統計」によると、一九一一年までの留米學生は六百五十名、うち女性は五十二名で平均年齢は二十五歳であった（注8）。

民国成立以後から末期にかけて、欧米への留學生は、以前より数が増えただけでなく、知識レベルが比較的良好、専門分野も幅広く、しっかりした目的を持っている者が多い。また大学卒業後欧米大学院に進むものも多かった。

一方では、清末から盛んであった留日は、民国以後、国内外の動乱とともに新たな「留日熱」が起こった。この時代の波の中で女子たちの留日も形式上、動態が変わってしまったのである。

二、日本留学

日清戦争の敗北によって、中国政府は、日本が明治維新後、教育を通じて西洋学を採り入れて人材を養成し、民智を啓蒙して、強国となったことを重視し、清朝の封建体制を維持しつつ、日本と同じように教育を通じて人材を養成しようと企図した。日本を通して西洋をまなぼうという気運が高まったのである。張之洞が代表した、「中国の学問を体となし、西洋を用となす」という「中体西用」論の主張、そのほかにも留日は距離的にも近く、文字と風俗習慣が似ているなどの利点もあった。張之洞は『勸学篇』「遊学第二」で次のように述べている。「遊学の国に至っては、西洋は東洋に如かず。一つ、旅費が節約でき、多くの派遣ができる。一つ、中国から距離が近く視察しやすい。一つ、東文は中文に近く、通曉しやすい。一つ、西書は甚だ繁雑で、西学の必ずしも必需でないものは東人がほとんどすでに削除し、適宜改訂している。中日の人情風俗は近しく、学びやすい。半分の力で倍の成果を得ることができ、これに越したことはない」。それ以後、日本に留学する者が絶えず、年々増加し、中国国内では日本への留学熱が沸き起こった。

中国が、日本に初めて留學生十三名を派遣したのは光緒二十二年（一八九六年）のことであった。この段階では、未だ女性は含まれていなかった。

光緒二十八年（一九〇二年）、京師大学堂の総教習である吳汝綸が日本の教育視察をした時、前山陽高等女学校校長の望月與三郎は、女子教育の重要性について次のように言った。「…国家百年の大計は女子教育にある……」。また、実践女学校の校長でもある下田歌子も「私は七～八年前から、貴国の女子がわが国に遊学し、文明を求めたいと願っていることを知っている。しかし貴国の人々は、私の勧めにもかかわらず私の言うことを信じない。とりあえず、一～二名を遊学させ、効果があるかどうかを先ず試してみてもどうか」（注9）

一方、日本政府は、「馬関条約」の利益保護と、在華勢力の拡張のため、「清国保全論」という政策のもとで、中国人留学生を大量に受け入れた。当時の日本では、専ら中国の留学生を受け入れる学校が相次いで現れた。最初の学校は一八九六年、嘉納治五郎が東京牛込に創設した弘文学院という学校である。十三名の中国留学生を入学させ、三年後、七名の留学生が卒業した。一八九九年十月に「亦楽書院」と更名した。

一八九八年、日本陸軍士官学校の予備校とされる成城学校は「清国留学生部」を設置し、一九三七年の盧溝橋事件の発生まで開校していた。中国留学生を受け入れた学校の中で、一番長かったと言える。そこでの勉強科目は、日本語と軍事基礎知識で、成績優秀な学生が日本陸軍士官学校に入る。また同年、高楠順次郎が東京本郷で日華学堂を設け、主に日本語と教養基礎知識を教えた。

一九〇一年から一九〇六年までが「留学熱」の最盛期であった。その時期に中国留学生を受け入れる学校、あるいは部署が数多く出てきた。主なものをあげると、一九〇一年の東亜商業学校、一九〇二年の東京同文書院、宏文学院である。宏文学院も嘉納治五郎が設立した学校で、魯迅、黄興、陳独秀らが学んだ。次は一九〇三年に寺尾亨が創立した東文武学堂、同年の振武学校。一九〇四年の法政大学速成科と普通科、吉田義静の経緯学校（明治大学に所属）、一九〇五年九月の早稲田大学清国留学生部などである。また路砒学校、警監学校、志成学校および警官速成科があった（注10）。以上の学校は日本留学の風潮の中で創設された学校であるが、実際、師範学校には留学生が最も多かった。それは、清政府の学校教員不足という問題を解決するための教員養成が、日本の思惑と合致したのである（注11）。当時、東京高等師範学校、宏文学院の速成師範科などが最も有名であった。しかし、これらは男子生だけを受け入れた学校である。

本時期の留学教育は近代教育発展の中で、最も重要な一時期となっている。留学はやはり、日本が最も多かった。「学部の光緒三十二年における統計によれば、日本留学生は計一万二千三百名となる。しかし同年の各校の統計によれば約六千名余であり、また、七千名を超えている説もある」（注12）との一説がある。汪向榮の『日本教習』によれば、一九〇六年、留学生の総人数は七千二百八十五人（注13）に達した。ほかに、一九〇一年は二百八十名、一九〇二年約五百名、一九〇四年約二千四百六名という。実藤恵秀『中国人留学日本史』によると、一九〇五年の留学人数は八千名、一九〇六年も八千名になっている（注14）。

当時、実践女学校は中国の女子留学生の受け入れで最も有名であった。実践女学校は一八九

九年（明治三十二年）、女子教育の先駆者である下田歌子が女性の社会的自立を目標として、豊かな教養を身に付け、女性に備わる徳性を涵養し、学問的啓発を促すために創設したものである。校名の「実践」は、学問を実際に役立て実行するという意で、実践的能力の開発にも意を注いだ。創設者下田歌子は一八九八年帝国婦人協会をつくって会長に就任し、翌一八九九年、その協会が実践女学校および女子工芸学校を設立したのである。中国女子留學生がほとんど速成師範教育を学ぶ目的であったため、彼女は文部省に上申して「清国留學生教科規定」の認可を得て、東京の赤坂にあった西洋館を借りて、中国女子留學生速成師範科を設け、本格的に中国女子留學生の教育を始めた。一九〇一年十二月の『日本留學生調査録』によると、当時三名の中国女子留學生が東京にいた（注15）。これは、私費で日本に留学した始まりである。このことについて『下田歌子先生伝』の中に次のように記載されている。「明治三十四年、辛丑の歳、一人の清国女性が、ゆくりなく麹町の校舎に入学した。彼女は最初、その父兄に伴われて日本にやって来て、特に校長下田歌子先生の名を慕い、日本での完全な女子教育を受けたいために、意を決して身を実践女学校に寄せたのであったが、すでに日本語も相当話せるし、技芸の教授を受ける点に於いては格別日本人の他の生徒と変わるところがなかった」（注16）。その後、中国女子留學生が続々と日本に留学した。彼女たちは殆どが裕福な家庭の出身で、年齢もまちまちであった。「彼女たちのほとんどは、父親や兄弟、あるいは夫同行で、二十歳余りの人がいれば、八、九歳の幼女もいた。しかも私費留学であった。」（注17）。これらの中国の女性に対しては、下田歌子は「中国の女性には三つの長所があげられる。一つ、聡明で、学習がよくできる。一つ、交際が上手で対応も宜しい。一つ、性格が明るく、アメリカの女性によく似ている。」（注18）初期の中国人女子留學生は、私費留学で、一九〇三年には十人あまりであった。（注19）

日本への官費留学は一九〇五年、湖南省が二十名の女子学生を実践女学校速成師範専科に派遣留学させてから始まった。その名簿は表1のようである。

表1 湖南省の二十名の女子官費留學生名簿

姓名	出身地	年齢	姓名	出身地	年齢
聶緝熙	湖南衡山	48	姚寧生	江蘇上元	22
黄憲佑	湖南善化	43	黄国厚	湖南長沙	22
楊 莊	湖南湘潭	28	許 馥	湖南善化	21
張漢英	湖南醴陵	29	曾尚武	湖南江陵	19
朱秀松	湖南江陵	25	朱敬儀	湖南江陵	17
凌樵松	湖南平江	23	陳光暉	湖南長沙	17
許 璧	湖南善化	18	吳 雙	湖南湘潭	17
黄 華	湖南湘潭	29	黄国巽	湖南長沙	17
王昌国	湖南醴陵	29	黄 輝	湖南長沙	15
許 薇	湖南善化	23	胡懿瓊	湖南湘潭	14

表1の二十名の留学生のうち、前十三名は速成師範科に、ほかの七名は工芸科に入学した。故に、最初の女子留学専門として最も注目されるのは師範科であった。年齢からみれば、十代の者は八人、うち最も若い者は十四歳である。二十代の女子は十名、四十代は二名がいた。支給される官費は、全国的に一致しているわけではなく、主に三等級に分けられる。国立大学入学者を第一等、一人当たり一年間で日本円にして五百円、国立高等専門学校の留学生あるいは国立大学の専科生を第二等、四百五十円、私立大学以上の学校あるいは普通教育を学習する者を第三等、四百円とした。

官費留学が始まった主な原因は、一九〇四年の「奏定学堂章程」の発布とともに中国の新教育が急速に発展したためである。地方各省の為政者も女子教育の重要性を痛感し、続々と官費女子留学生を日本に派遣した。一九〇四年夏、奉天農工商務局総弁の熊希齡が日本の工業教育制度を視察するために訪日、実践女学校をも訪問した。そこで、校長である下田歌子と、師範教育の勉強のため、毎年奉天から女子十五名ずつを同校に派遣することを契約した。(注20)これがきっかけで、湖南省に続いて、一九〇七年、奉天女子師範学堂は二十一名の女子学生を派遣、師範科で勉強させた。江西省は十名、雲南省は十三名を実践女学校に留学させた。(注21)一九〇七年になると、東京で留学している女子留学生は百名に上り、一九〇九年には百四十九名に達したのである。一時期、中国でも下田歌子は広く知られ、孫文も下田歌子に対し、留学生教育を依頼する手紙を送っている。また、彼の姪である伝文郁も日本に留学させている。

実践女学校は本科が二年、特別科は一年である。特別科は師範速成科と工芸速成科の二科に分けられている。師範科の科目は、修身、英語、教育、心理、理科、地理、歴史、算術、幾何、図画、体操、唱歌、手芸、英語、家政など十五科目になっている。

表2 実践女学校清国留学生卒業生数(明治37~44年)

卒業年月日	学科(卒業年回数)	人数
明治37年7月16日	普通科(第1回)	2
明治39年7月20日		5
同上	速成師範科(第1回)	2
同上	同上 聴講生	3
同上	速成師範工芸科(第1回)	2
明治40年3月31日	同上 修了生	2
明治41年3月28日	普通科(第2回)	4
明治41年11月5日	速成中学科(第3回)	1
明治42年3月26日	工芸科(造花科第1回)	4
明治42年7月21日	中学科(第1回)	12
同上	工芸科(第2回)	14
同上	速成師範科	6
同上	中学科	8
明治43年3月27日	工芸科	13
同上	師範科(第1回)	6
明治43年12月24日	工芸科(第3回)	4

明治44年 3月25日	幼稚園速成保育科 (第1回)	2
同上	中学科 (第2回)	2
	工芸科 (第4回)	
備考	「中国留学生卒業証書台帳」参照	計92名

出典『実践女子学園100年史』

表2の通り、一九〇四年（明治三十七年）から一九一一年（明治四十四年）までに実践女子学校を卒業した中国女子学生は九十二名になっている。そのうち、師範科に関する科目の卒業生は三十九名、幼稚園速成保育科の四名を加えれば四十三名になり、卒業生総数の半分に近い。それは清政府の教育近代化過程において、急速に発展した小・中学校の教員不足が極めて深刻で、その事態をいかに解決しようとしていたかを窺わせる。

このように多くの中国女子留学生が、実践女学校で学んだ。「女英雄」と呼ばれている秋瑾もそのひとりである。秋瑾、本来の名は閩瑾（けいきん）。「閩」は女の子という意味で、日本留学時代に閩の字を取って秋瑾とした。福建省閩侯（びんこう）県の官吏の家に生まれた。原籍は浙江省山陰県、現在の紹興である。四人兄妹の二番目で、父は家庭教師を雇って子供達に教えた。秋瑾は兄妹の中でもよく努力し聡明でもあり、成績はいつも良かったために、父は唐詩・宋詞などを特別に教え、彼女は十一歳から詩をつくることができた。

幼い頃、纏足された秋瑾は、女性の「運命」に屈服しなかった。彼女は兄達と同じ教育を受け、武術、棒術、拳闘、剣舞、乗馬を学んだ。武術を鍛錬した時、足が血だらけになっても止めることなく続けたのである。

秋瑾は一八九六年、二十二歳の時、親の決めた湘郷の富商王系の三男、王廷鈞と結婚し、二人の子供を生んだ。この頃、清朝の光緒帝は新政の「戊戌変法」を行い、一方、孫文を始めとする革命派は清朝を打倒し民国を創立しようという主張を明確にしていた。この時代の変動の中で秋瑾は、先ず改革の第一歩として、女性を「三寸金蓮」の纏足から開放することを主張した。彼女は自分だけではなく、反纏足の「天足会」を通して女性に呼びかけるとともに、背広、洋靴、帽子という姿の男装をした。また、自ら「競雄」という号をつけ、男と雄を競おうとしている。友人呉芝瑛の紹介で、京師大学堂の日本人教師である服部字之吉の妻の繁子と知り合い、日本に留学をしようと決めた。夫の王廷鈞に強く反対され、夫は二人の子供もあるので引き留めようとしたが、「子供を連れて留学する」と言った。王廷鈞は仕方なくそれを認め、息子を自分が引き取り、娘を秋瑾に押し付けた。

一九〇四年六月二十八日、秋瑾はまだ三歳になっていない娘を抱いて、服部（繁子）夫人と一緒に塘沽から日本への客船、ドイツ船「独立号」に乗り、神戸を経由し七月二十四日に汽車で東京に着いた。最初、日本語講習所（中国留学生会館が設置）で日本語を勉強し、一九〇五年八月に、服部繁子が実践女学校の校長である下田歌子に秋瑾を推薦、入学させたのである。

筆者は、二〇〇三年、来日中国著名人の足跡を調査するため、秋瑾が留学した東京都渋谷区にある「実践女学校」の旧跡（現 実践女子学園中学校・高等学校）を訪れた。三人の職員の

方は熱心に当時の書類を探してくださり、そこで貴重な「證書臺帳」や卒業生の名簿などを見せてもらった。秋瑾は一九〇五年八月に実践女学校に入学したことが記録に残っている。

『清国留学生部・分教場日誌』の中に、「明治三十八年八月五日、本日学生秋瑾入校ス」と記載してある。秋瑾の日本留学は一九〇四年六月から一九〇五年十二月にかけてのことだが、その間、一九〇五年四月から七月十七日までの間一度帰国していた。その時上海で、蔡元培、徐錫麟に会い、革命組織「光復会」に入会したのである。そして再び日本に来て、実践女学校に留学、同年九月四日、宋教仁の紹介で孫文の談話を聞き、彼の主張に共鳴して中国同盟会に参加したのであった。日本には僅か二年しか滞在しなかったが、彼女の人生において、成熟した女性革命者となったという意味において大きな転換点であった。一九〇五年十二月「清国留学生取締規則」に抗議して帰国、「私は帰国後、革命に尽力し、皆様と中原で会うことを臨んでいる。」(注22)と同胞に語った。秋瑾は紹興に戻り『中国時報』を発刊、女権、女子革命を主張し、「光復軍」、「敢死隊」を組織した。また、紹興の明道女学校、浙江省の潯溪女学校の教員を歴任、一九〇六年の夏、上海へ出て革命運動の中で活躍、『中国女報』を創刊した。『中国女報』の中で、「本報の発刊の目的は、女学を振興し、女性を解放するためであり、団体化するためである。将来は中国の婦人協会もつくろう」(注23)と主張しており、また、男尊女卑を批判し、男女平等を提唱した。彼女は「警告姉妹們」の文章の中で次のように述べている。「……二万々の女同胞、まだ真つ暗地獄にいるようだ。一人の人間として志を持たなければならない。志を持っているなら、自立することができる。今、女学生も多くあり、工芸業も盛んになった。一つの工芸技術を学び、教習になったり、工場を開いたり、どうして自我自立ができないのだろうか……女子は教育を受けるべきだ。そうすれば家業が興隆、男子に敬重される。……女性は息子を産んだら必ず学堂に入れる。娘なら、やはり同じように教育させ、纏足は絶対にしてはいけない」(注24)。また彼女は、「日本の女学が振興し、皆一つの技能を持って生活し、父母を養い、家庭においても夫を助け、子には教育をさせる。こんな国は強くなるはずだ」(注25)と、女子教育の発展と国家の発展との関係は切っても切れない関係にあり、その重要性を認識しなければいけないことを説いた。

秋瑾が故郷の紹興に戻った後、大通学堂で教えながら、安徽省の革命党员である徐錫麟と連合して武装蜂起の計画を立てた。一九〇七年五月、徐錫麟の蜂起失敗と共に、秋瑾も逮捕された。「秋風秋雨人を愁殺す」の一句を書き残したが、自分の名前である「秋」を取って、二字の「秋」と「風雨」に合わせ、武装蜂起の失敗、そして祖国の運命への憂いと自分の沈痛な心境を表したのである。七月十五日、秋瑾は白い服を着て足枷をされ、両手を背中に縛り上げられ、清兵に連行され、刑場になっている紹興軒亭口で斬刑された。享年三十二。

秋瑾を記念するため孫文は、「巾幗（婦人のこと）英雄」と高く評価した。日本への留学女子学生の中から、秋瑾のほかに、何香凝、陳擲芬、唐群英、燕斌、王昌国、張漢英、村宗恵、吳木蘭、吳亜男、吳弱男のような、多くの女性革命家も輩出した。

一方、女性留学生のための学校は実践女学校、東亜女校および成（蹊）女学校（成蹊園とも

呼ばれる)のほか、まだ多くの学校も少人数の女子留学生を受け入れた。

表3 清国女子留学生受け入れ学校一覧表 (1904~1909)

学 校	人数	官費	私費	学 科 名
実践女学校	39	33	6	工芸科・保育科・補修科・保姆科・師範科・編織科
東亜女校	16	5	11	速成師範科
成(蹊)女学校	14	8	6	師範科・工芸科
日本女子美術学科	13	4	9	図書科・編織科・刺繡科・西洋画科・造花科
日本女子大学	6	5	1	英文科・教育科・博物科・理科・師範科
大成女学校	6	1	5	師範科
東京女子音楽学校	6	2	3	
		1人不明		
東京高等師範学校	4	1	1	
		2人不明		
東京女子師範学校	3		3	
東京女芸学校	4	1	3	専修科・造花科・細工科
東京養蚕講習所	4	2		製絲科
		2人不明		
女子職業学校	2		2	図画科・刺繡科・造花科
東京女医科	3	3		
修技女塾	2		2	摘科
東京女塾	1		1	選科
日本音楽院	1	1		音楽科
神戸女学院	1	1		理科
吉岡女子学校	1		1	高等科
奎文女学校	1	1		研究科
横浜女子実業補習学校	1		1	造花部
東京女子体操音楽学校	1		1	
東京保姆伝習所	1	(不明)		
神田数学校	1	(不明)		
体育会女子部洋裁縫学校	1		1	
日本婦人美術造花学校	1		1	高等科
官立女校	1	1		技芸科
京都女子高等手芸学校	1		1	造花科
英仏和高等女学校	1	1		

表3のように、実践女学校の中国留学生が最も多く、短期、中退の人数は入っていない。全体から見れば、官費留学が目立っている。留学の専門は師範科のほか、女子に向いている裁縫、刺繡、造花、保育などがあり、また理科、音楽、研究科、西洋画科などもある。

留日女子学生は、自然科学と社会科学の知識を学びながら、互いに団結し、祖国の現状を改革するための進歩的団体組織をも結成した。有名なのは一九〇三年に東京で胡彬夏によって成

立された「共愛会」(注26)、一九〇七年に、湖北留日女性の李之登によって「中国留日女学生会」が設立された。彼女たちは、女権と中華民族の振興を主張した(注27)。留日女学生はいろいろな雑誌、新聞を発刊した。有名なのは『女学報』・『女学魂』・『中国新世界雑誌』・『留日女学生会雑誌』などであった。

終わりに

三十年代以後の留学も絶えずに続いたのである。ただ、一九三七年から一九四五年までの間の留米学生の人数は比較的lowく、不安定な状態となっている。女子生は一九三八年から増えたり減ったりしているが、比率はやや高くなっており、九年間の女子は四百八十五名、男子総数千五百八十名の三十・七%を占めている。一方、留日学生の人数については、『中華民国二十五年 日本昭和十一年留日学生名簿』によれば、一九三四年の官費留学生は七百七名、私費留学生は千百十五名であった。三十年代の女子留学生の様子は清末とは大分違う。人数が大幅に増加し、一九三六年の女子留学生は日本の五十余りの大学、専門学校、女子校に分布し、人数は四百八十三名、当時の総留学人数の八・五三%を占める。一九〇七年の初期女子留学人数二百名余りと比べれば、二倍以上に達した。もう一つは、勉強科目が大きく変わったことである。もとの家政、造花、刺繍などの女性専門の学科から、幅広く医学、薬学、歯科、商業などに発展した。さらに名門大学に通う現象も出現した。東京帝国大学、京都帝国大学、東北帝国大学、九州帝国大学から早稲田大学、明治大学、法政大学、専修大学などの名門私立大学まで、また高等師範学校、高等商業学校など、留学先からみれば三十年代の留学生の教育の質が概して高くなっている。初期の留学先は、女子に限れば中等レベルぐらいの学校が殆んどであったが、三十年代に入ると男性と同じように高等教育を受けることもでき、知識の勉強と研究を行う女子留学生の増加は、近代の女子教育の発展を物語ると言える。

注

- 1、『万国公報』 光緒25年6月 台北華文影印本第30冊 1969年出版
- 2、『政治官報』 光緒33年12月25日
- 3、『順天時報』 1911年4月9日
- 4、『教育雑誌』 3年6期
- 5、陳啓天『最近三十年之中国教育史』 P.322 文星書店 1962年
- 6、教育部「選派留学外国学生規定案」 多賀秋五郎『近代中国教育史資料・民国編中』 P.209
- 7、『順天時報』 宣統3年3月11日
- 8、『教育雑誌』 第6期 1911年
- 9、「吳汝綸と『東遊叢録』—ある「洋務派」の教育改革案—」 『国際関係論のフロンティア』 2巻 東京大学出版局 1984年

- 10、実藤恵秀『中国留学生史談』 P.193~200 第一書房 1980年
- 11、李記喜『近代中国的留学生』 P.135 人民出版社 1987年
- 12、陳青之『近代教育史』上 P.135 中華書局
- 13、汪向荣『日本教習』 P.117 三聯書店 1988年
- 14、実藤恵秀『中国留学生史談』 P.451 第一書房 1980年
- 15、「日本留学生調査録」『選報』 第10期
- 16、実藤恵秀『中国人日本留学史』 P.76 三聯書店 1983年版
- 17、「共愛会同人勸留学啓」『江蘇』 第6期
- 18、下田歌子「教育中国婦女の事」『順天時報』 1907年1月12日
- 19、実践女学校『下田歌子先生伝』 1943年 山崎朋子『アジア女性交流史』 P.97 筑摩書房
- 20、「各省遊学叢誌－奉天」『東方雜誌』 第四年第三期・教育 P.63
- 21、房兆楹『清末民初洋学学生題名録初輯』 P.45
- 22、梁占梅『中国婦女奮闘史』 P.63 建中出版社 1942年
- 23、「創辦中国女学報之草章及び意旨広告」『秋瑾集』 P.10 上海古籍出版社 1979年
- 24、『秋瑾集』 P.13~14 上海古籍出版社 1979年
- 25、秋瑾『致湖南第一女子学堂書』『女子世界』 第二年第一期 1905年6月
- 26、『女学報』 第二年第4期 1904年
- 27、『中国新世界雜誌』 第2期 1907年

(さい しゆくふん：アジア文化学科 教授)